

東書 六年

ヒロシマのうた 今西 祐行

○ 目標

・ 水兵だった稲毛の「戦争ということが、こんなに悲しいものであることを、そのとき初めて知りました」に込められた小さな命・ミ子（ヒロ子）への関わりを考えたい。

第一次指導（概観）（二時間扱い）

〈区画〉 八区画（始）（3）中（1）終（4）

一よむ（音読） 八名 * 二二名も有り）

二とく（読後感の話し合い）

○ 題目

① 「ヒロシマ」とカタカナで書いてあるが、カタカナで書かれた言葉のことを何語というか。

（外来語 板書）

② それは、世界の広島になったということ。どうして世界の広島になったのか。

（原爆 板書）

③ その原子爆弾が落とされたのは、いつか。

（1945年8月6日 板書）

④ その広島市に稲毛さんが救護に入ったのは、いつだったか。

（7日午前3時 板書）

◎ つづき

⑤ 「ヒロシマのうた」という話が生まれるもとなったのが、その翌日の夜明けのことだった。何があったのか。（女の人と赤ちゃんの発見）

⑥ その赤ちゃんが、稲毛さんの機転で洋裁学校の生徒にまで育てていく話。

○ 手引き

⑦ 稲毛さんが聞いた声の主を、それぞれの区画の「」を手掛かりに書き出す。

三よむ（指示に沿って黙読）

四かく（視写）

* 1〜4までは、全員で行う。

1軍医 2女の人 3二人の人 4ラジオ

5橋本さん 6ヒロ子 7ヒロ子 8お母さん

五よむ（一名）

六とく（板書をもとにした話し合い）

○ 事実・区分

① ヒロ子の年齢は。 （7才・15才 板書）

② 8の「お母さん」はヒロ子の何で、名前は。

（育ての親 橋本さん 板書）

③ ところでは、育てのお父さんは。

（原爆症（白血病）で死んだ）

④ お父さんと一緒だったのは、いつまでか。（7才になる少し前 1952年2月 板書）

⑤ ところで、生みの親は、そして名前は。

（女の人 長谷川清子 板書）

⑥ そのお母さんの姿を見て、赤ちゃんの命のリーが始まり、一五才での再会の糸を結んだのが、何か。（ラジオの尋ね人の時間）

⑧ 放送を聞いたのも不思議であるが、最初に誰に相談しなかったから生れた話なのか。（軍医）

⑨ 四区分（2実母と一緒、4安心、と問う）

◎ 山

⑩ 詳しく読む所を三か所選ぶとすると、何番にするか。（2・5・8）

⑪ その中の一つ、8を明日は勉強する。

○ 余韻（原爆を落とすのも人、生き延びた幼い命を守るのも人、人間ってなんだろう？）

七よむ（全員で板書を指音読）

* 読みの時間が二〇分以内なら一時間扱いの工夫を

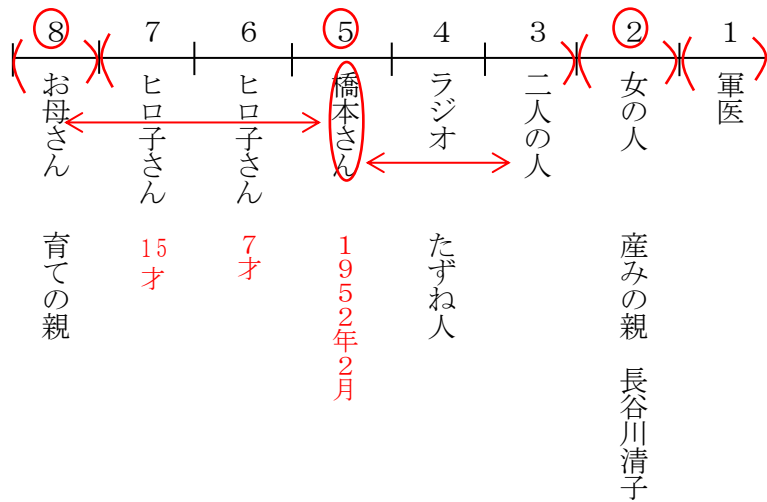
* 二時間扱いなら、四かくの途中まで。残りは家庭学習とし、日付や年齢等を計算してみることも勧める。

* 六とくの扱いも、より詳しいものになる。時間が残ったら時間まで読みを入れる。

〔板書事項〕

外来語

ヒロシマのうた
1945年8月6日
7日 午前3時



第二次指導第一時

第二次指導は二とく、六とくのみ

板書事項

二とく

○おまじい

・四区分を確認し、年月日を記す。

◎承接

・ヒロ子さんを巡る変化を中心に整理

○手引き

・一九六一年八月七日の稲毛さんとは橋本さんについて考える。会話から考えている部分まで。

8	7	・	・	3	2	1
母	ヒロ			二	女	軍
						1945年8月7日
						8日
						1952年夏
						1960年8月6日
						7日

島根
広島
洋裁学校 ワイシャツ

「よかったですね。」
「ええ、おかげさまで、もう何もかも安心ですもの……。」
お母さんはそう言って、笑いながらも、そっと目をおさえるのでした。

わたしはその日の夜、広島駅で、汽車が出るときに、窓からそれを受け取りました。わたしはそれを胸にかかえながら、いつまでも一五年の年月の流れを考え続けていました。

「よかったですね。」
「ええ、おかげさまで、もう何もかも安心ですもの……。」
お母さんはそう言って、笑いながらも、そっと目をおさえるのでした。
わたしはその日の夜、広島駅で、汽車が出るときに、窓からそれを受け取りました。わたしはそれを胸にかかえながら、いつまでも一五年の年月の流れを考え続けていました。

六とく

○語義・区分

・それを二区分(朝と夜)後を二区分

◎心

・「ヒロシマのうた」は誰の胸に響いていたか。どんな歌だろうか。その手がかりを考える。

○余韻

・この話は、忘れてはいけないうたなのだなあ。

*ヒロ子さんの危機とその成長を詳しく読むとこの話がより味わい深くなる、と付け加えて